

社文研ニュースレター 第13号

人文科学と社会科学のあいだ

社会文化科学研究科長 秋元英一

歴史研究というものも因果な商売である。私の場合、＜経済史＞ということになっているが、政治史や社会史を知らなくていいわけではない。研究対象である、ある時代の、いわば「全体状況」についての一定の認識がなければ、経済史の位置づけができないし、といって、いつまでも全体状況のことに囚われていては、肝心の専門研究に取りかかれない。

一生をかけて、非常に限定された範囲の歴史研究に従事する人を、ときにひとは「専門馬鹿」と呼んだりするが、そのように批判するひとは、逆に範囲を限定することによって、専門領域の研究がいよいよ深まり、したがって、一週間に8日間をそれにかけても楽しくて仕方がない、という一種の「ユーフォリア」にあることのできる幸福者を理解できない可能性もある。他方で、一生かけても、これだ！と言えるような自分の領域をもつことができず、右往左往しながら、研究生活を終わるひとも多いのではないか。

おそらく、前者の形に近いのが人文科学的な歴史家に多く、後者に近いのが社会科学的な歴史家に多いのではなかろうか。とはいっても、現代史の領域になると、どちらの歴史家も現状に対する関心が強く、たとえばアメリカ史の分野なら、9・11テロ以後はそれをどう考えるかを意識していないと、あたかも「象牙の塔」の歴史家であるかのように批判されるかもしれない。しかしながら、テロという事象だけを抜き出して、絶対悪であるかのように批判することがもし流行でもするなら、それはもはや、歴史研究ではなく、集団ヒステリー状況に似通ってくるであろう。そうしたことを避けて、眼前で進行する「今の歴史」に多少とも距離を置くには、上に述べた「専門馬鹿」的な愚直さによって、脅迫観念的なゾレンにいろどられたわれわれ自身の感覚を薄めるしかないであろう。

今回、三浦前研究科長によって始められ、平成18年4月に実施される予定の人文社会科学研究科への改組は、その再編の中軸に前期課程（修士）も後期課程（博士）も公共研究専攻を置いているが、この専攻だけが（中で分かれているとはいえ）人文科学系と社会科学系を併置している。日本に「私小説」というジャンルがあると主張されることがあるような、そうした「わたくし」と、専制国家による思想・信条の統一といった自由の抑圧につながるような「公」？の強制のあいだのどこかに、「公共空間」があり、その空間の望ましい姿を追求するという、理念があるのであると考えられるが、むろん、十人十色の解釈がここですでにありうる。専攻内部の教育研究領域の名称に現れているように、人文系の人びとは、「共生」にこだわり、社会系の人びとは「公共」にこだわったが、それは、多少とも上に述べた傾向を反映している。

だが、案ずるより産むが易し、で、前期で5つ、後期で3つの専攻に入ってくる学生はこのきらびやかな「新しい」学問体系の展覧に多少のとまどいを見せつつも、やはり、上述の2つの極端のどこかに自らを位置させて、自分の学問の構築に進むことが期待されよう。そうしたなかで、われわれおしえる側も刺激を受け、変わっていくのかもしれない。

平成16年度後期課程博士学位取得者

氏名	論 題	取得学位
野村真弓	日本の歯科医療の政策分析—高度経済成長から高齢社会へ—	博士（学術）
光延忠彦	東京の政治—統治システムの管理から—	博士（法学）
宮森一彦	家族ケアにおける過剰性の歴史社会学的解明—認識と制度の断層から—	博士（学術）
南相九	戦後日本における戦争犠牲者の「記憶」—国家による戦没者の追悼・顕彰・「補償」—	博士（文学）
望月由紀	ホップズにおける人間—その哲学における方法、言葉、道德	博士（学術）
須藤温子	読解の欲望・狂気・盲目性—エリアス・カネッティの『眩暈』（1935）を中心に	博士（文学）
望月由美子	ゴンザーガ家君主の寝室（1444—1540）における太陽と鷲の政治図像学とジェンダー表象—君主の不滅の身体と正妻の懐胎する身体—	博士（文学）

学位取得者から「博士号取得についての所感および近況」をお寄せいただきました。学位請求論文を提出をめざす皆さん、どうぞ参考にして下さい。

学問としての「旅」

光延忠彦

思えば、大学院に入学し、日本政治の研究に着手したのは、村山内閣が唐突の辞意表明によって橋本内閣に交代した1996年春のことであった。橋本内閣の誕生は、郷里の待望であっただけに個人的にも期待するところも大きく、上京後、早速、国会を訪ねた記憶がある。それからは、研究室と国会を中心に日本政治への研究生活が始まった。今まで伝える側であった者が、今度は分析する立場に、対象とは一步距離を置いて関わるようになったのである。

当時から、実際的な問題関心からのみならず、学問的関心からも、いずれは日本政治を本格的に研究したいと考えてはいたが、そうした漠然とした構想が、本学において学位という形で結実したことは、今更ながら意義深いものを感じる。率直に言えば、地方の片田舎の出身者にとって、「末は博士か大臣か」といった言葉に象徴的のように、学位取得は高嶺の花であったからである。

この間を冷静に振り返るならば、研究対象とともに学問に対する問題関心もその後大きく変容した。当初の国政から地方政治へ、そして首都の政治に対象は移ったが、それと同時に、学問に対する姿勢も、実際的な問題関心を中心にしつつ、より自立した学問固有の価値を積極的に認識する方向に移った。市町村政や県政、地方選挙を真近にしてきた者にとって、知的ゲームに矮小化して対象を考える学際的風潮には違和感もあったが、こうした

点にも意義を見出せるようになったのである。

幸いなことに、このような姿勢で対象と向き合えたのも、多くの方々の指導と励ましによるところが大きい。指導教官、諸先生、助手室、同僚、後輩など実に多くの方々のお世話になった。この場をお借りして、ここに改めて感謝を申し上げたい。今後は、やっと出発点に立てた日本政治研究をさらに進展させ、学会はもとより、日本政治の発展のため、微力ながら精進して参りたいと考えている。

社会文化科学研究科を修了して

野村真弓

大学職員と学生の2足の草鞋を履く私の生活もこの3月で一区切りが着いた。1994年秋に放送大学の3年次に編入してから、千葉大学大学院社会文化科学研究科の修了まで十年余りの社会人学生を、周囲の理解と協力を得て続けることができた。

日本大学歯学部で図書館職員として社会人生活をスタートした私は、図書館の膨大な資料を前にして、これらの研究成果は社会にどのように貢献しているのかが気になり始めた。また、医学部・歯学部の入学定員の削減が始まり、その動向にも関心を持ったことが、このような生活を始めるきっかけであった。初めは医学情報の流通やその生産性に関心を持っていた。しかし、図書館から研究支援業務に移り、研究の開始から成果報告までの一連の流れに関わるようになると、医学研究の動向と政策との関係が気になり始めた。その頃、社会科学の分野で医療経済学や医療政策学として研究が行われていることを知った。医療専門職ではない私にとって、経営学的なアプローチは社会人としての経験からも理解しやすく、また、実務にも役立った。

医療をサービス産業ととらえ、医療機関を経営体としてみると、そこから現在の医療制度が抱える問題、さらには日本の社会保障制度が陥っている制度疲労が浮かび上がってきた。とくに私が研究対象としている歯科医療では、公私の区分や、競争的な市場、経済格差と健康の不平等、保健・医療・介護の融合などの、現在の医療制度が抱える課題が鮮明に観察されている。

社会文化科学研究科の修了を機に、この4月から社会文化科学研究科の21世紀COEプログラム「持続可能な福祉社会」の公共政策セクションにCOEフェローとして参加している。今後は、これまでの歯科医療と社会に関する研究に加えて、平均寿命ではなく健康寿命を伸ばしていく政策ミックスについて、より広範な社会政策としてとらえる研究の機会を得られたことに感謝している。今後とも周囲に協力を仰ぎながら「持続可能な福祉社会」に向けて何かしらの貢献ができるよう努めたい。

博士号取得についての所感および近況

宮森一彦

在学生の皆様こんにちは。博士号取得に関して所感・・・経験をふまえたアドバイスとして何点か指摘しておきたいと思います。

まず、論文の作成・提出にあたっては、指導教員グループとの連絡をきちんととってゆ

くことが必要です。私達院生はおしなべて研究が大好きですから、その話ならば飽きずに日常的に夢中になって行っているわけですが、事務的な手続きをきちんとふまえていくことを忘れてはいけません。私が際立ってルーズだっただけかもしれませんが・・・。

論文の内容については、私の場合、修士論文が全体的にエッセイ調であるという指摘を受けていたため、全体的に学術論文としての形式をきちんと整えることが大きな課題でした。その訓練は、指導教員の方々のご指導はもちろん、学術誌への論文投稿を通したレフェリーの方々や編集委員の方々とのやりとりのなかで学ぶところが多くありました。

学内の指導教員の方に比べて、学術誌の匿名のレフェリーの方々の批評は概して手厳しいものであり、この時点でショックを受けて匿名レフェリーのある学術誌に論文を出さなくなってしまう人もおりますが、それではその業界で広く通用する学術論文はいつまでたっても書けませんし、人格形成上も、内輪の論理だけで根拠のないプライドを肥大化させるばかりになってしまいかねません。そうした観点から、私は匿名レフェリーの無い所には論文を出さないようにしました。

とはいえ私も、結果的に十分な質の博士論文が書けたとはとても言えません。探究したかったこと、描きたかったことに比べて、自分の成し遂げたことの小ささに愕然とします。しかし、博士論文をまとめたことで、次にやるべきことが明確になるという効用は確かにあったのです。

私の近況ですが、群馬松嶺福祉短期大学の児童福祉専攻で、家族援助論（児童福祉の現場における家族支援の方法、ひいてはその背景となる家族変動への理解を深める授業）の非常勤講師をしております。

7月には、拙著論文「老人と子供のケア関係におけるダブル・バインドの歴史社会学的解明 ―「美風」言説と老人の居場所―」が、家族問題研究会の『家族研究年報』№30に掲載される予定です。

////////////////////////////////////

平成17年度入学者の紹介

日本研究専攻 12名

氏名	研究テーマ	指導教員（左欄教員が主任）		
大内郁	日本における「アウトサイダー」・アート観に関する歴史的研究：戦中・戦後期の「障害者」と「芸術」	長田謙一	三宅晶子	池田 忍
太田岳人	イタリア・ファシズム政権期における芸術政策について	長田謙一	三宅晶子	池田 忍
韓葵花	日中自動車部門における企業間関係の比較	武蔵武彦	野澤敏治	野村芳正
菊地浩平	手話言語使用会話場面における話順メカニズム交換と問題の管理プロセスの解明：Signer-Signer場面とSigner-Speaker場面の両面から	村岡英裕	中川 裕	片桐雅隆

小林久夫	演劇教育実践と演劇におけるフリースクールの意義と可能性の探究	橋本裕之	廣井良典	武井秀夫
薩仁高娃	内モンゴルにおけるシャーマニズムの研究：内モンゴル・ホルチン地方におけるシャーマンとオンゴット	荻原真子	鈴木 紀	三浦佑之
斯琴	アラシャ・モンゴルの口承文芸研究	荻原真子	中川 裕	三浦佑之
林里香	接触場面における意味交渉過程の分析	村岡英裕	宗宮好和	小倉美知子
YAYAN SUYANA	日本語とインドネシア語における「態」と「他動性」	松本泰丈	中川 裕	小倉美知子
楊明	日本語の可能表現の研究：日本語・中国語の対照研究の立場から	松本泰丈	中川 裕	村岡英裕
吉村旭輝	芸能者の意識への照射：田楽躍を中心として	橋本裕之	三浦佑之	菅原憲二
李光国	交通をめぐる市民社会形成の日中比較	野澤敏治	安孫子誠男	奥本佳伸

都市研究専攻 10名

氏名	研究テーマ	指導教員（左欄教員が主任）		
入江俊夫	知識概念・規範の生成・現実の理解可能性に関する研究	永井 均	高橋久一郎	忽那敬三
大島秀晃	住宅、土地問題における民間部門と公共部門の役割について	松田忠三	宮崎隆次	清水 馨
木村智哉	日本におけるアニメーションを中心とした大衆文化とナショナル・アイデンティティ	池田 忍	三宅晶子	長田謙一
江涛	中国の譲渡担保に関する研究：中日英の比較制度論研究	小賀野晶一	植木 哲	鎌野邦樹
佐々木えりか	社会的世界として現出する短歌の世界の研究	片桐雅隆	櫻井 厚	米村千代
田端克至	マクロ不均衡と国際通貨制度	野村芳正	松田忠三	柿原和夫
角田季美枝	流域環境政策論	倉阪秀史	廣井良典	鈴木庸夫
藤方博之	大名家臣の「家」と近世武家社会	菅原憲二	佐藤博信	坂本忠久
宮田裕行	戦争責任の哲学	小林正弥	内村博信	関谷 昇
李金灯	シャーマンの病氣治療の過程：モンゴルの事例から	鈴木 紀	武井秀夫	荻原真子

[illegible][illegible]

(3) 「コンバウン朝前期における地方支配者の任命について—フルトナー・ピャッサー（国務院決定書）の分析—」『東方学』99輯（2000年）所収。

⑧散歩

⑨多忙な毎日とは思いますが、手間ひまかけた調査研究をすこしずつ積み重ねていってください。

関谷昇

①せきや のぼる ②公共哲学史 ③1971年

④千葉大学大学院社会文化科学研究科修了、博士（法学）（2000年）

⑤千葉大学法経学部助手（2000年）、千葉大学法経学部助教授（2003年）

⑥16～18世紀西欧の社会契約説と立憲主義を中心とする思想史研究共生原理の規範研究

⑦・単著『近代社会契約説の原理——ホッブス、ロック、ルソー像の統一的再構成』東京大学出版会、2003年

・共著『丸山眞男論——主体的作為、ファシズム、市民社会』東京大学出版会、2003年

・単著「社会契約説の応用と実践——その再構成と現代的意義」（日本公共政策学会『公共政策研究』第4号、2004年、44-58頁）

⑧アウトドア

⑨輸入学問から脱却して独自の視点からの研究を実践して下さい！

教員が刊行した著作（平成17年1月～6月）

氏名	タイトル	出版社・刊行年月	形式
青山紘一	知的財産法基本判例ガイド	朝倉書店、2005年4月	編共著
青山紘一	特許法（第7版）	法学書院、2005年4月	単著
青山紘一	不正競争防止法（第2版）	法学書院、2005年4月	単著
雨宮昭彦	競争秩序のポリティクス——ドイツ経済政策思想の源流	東京大学出版会、2005年	単著
雨宮昭彦	後発工業国の経済史——キャッチアップ型工業化論	ミネルヴァ書房、2005年	共訳
小林正弥	ネクスト 善き社会への道	麗澤大学出版会、2005年3月	監訳
桜井厚	境界文化のライフストーリー	せりか書房、2005年1月	単著

自著紹介

雨宮昭彦著『競争秩序のポリティクス——ドイツ経済政策思想の源流』東京大学出版会、

2005年。ISBN:4-13-040220-X

<紹介文>

両大戦間期から戦後のドイツにおいて大きな影響力をもった経済政策思想である「秩序自由主義」（「オールド自由主義」）の生成過程とその理論的特質を、ワイマール共和国における経済政策論争、ナチスの経済政策、そして戦後西ドイツの「社会的市場経済」論との関連の中で明らかにする。ナチスの経済政策はこれまでケインズ主義に近いものと捉えられてきたが、本書では、「秩序自由主義」という新自由主義の類型との親和性を明らかにし、ドイツ経済史研究に対して修正を迫る。「反自由主義に根拠づけられてのみ存在する自由主義」という、今日ますますアクチュアルな意義を有してきた経済政策思想の歴史的源流を解明し、その陥穽を予示する。フランス経済史を専門とする小田中直樹氏（東北大学経済学部教授）の次のブログでは、拙著の論点が、イギリス経済史家岡田与好氏の見解と対比されたり、オスカー・ランゲの経済理論と比較されたりするなど、鋭いコメント入りで取り上げられている。

<http://d.hatena.ne.jp/odanakanaoki/20050524>

ガーシェンクロン著、絵所秀紀・雨宮昭彦・峯陽一・鈴木義一訳『後発工業国の経済史——キャッチアップ型工業化論』ミネルヴァ書房、2005年。ISBN:4-623-04381-9

<紹介文>

「後進性優位」仮説は、ガーシェンクロン・テーゼとして、単に経済学のみならず広く社会科学一般に甚大な影響を与え続けてきた。伝説と化するほどに高名なこの経済史の巨匠の著作は、日本語の訳がほとんどないということでも有名であった。この経済史研究の古典の神髄を示す重要論考10編を収載する。筆者が担当したのは方法論、認識論を扱った5、6章。「工業化」の行きすぎに付された疑問符が決定的に大きくなった今日、ガーシェンクロンのテキストは、進化の多様性を発見し擁護した経済史家として、今もなお色褪せないアクチュアルな輝きを放っている。しかしそれだけではない。彼のテキストには、様々な言語で書かれた古典の数々が埋め込まれており、その迷路のような文体を通じて歴史を遡行していく不可思議な旅に誘っている。たとえばライブニッツ。私はその翻訳作業を通じてこのバロックの哲学者のすごさ、奥深さに触れた。ガーシェンクロンのテキストは、人間主義や近代主義や紋切り型の歴史観を超える緊密で複雑な数々の編み目をそれ自身の中にもつことによって、すでに予め乗り越えられてしまっているのである。その乗り越えの可能性を実現するのは読者自身に委ねられているといってもよい。

アミタイ・エツィオーニ著、小林正弥監訳、吉永・田久保・工藤訳『ネクスト 善き社会への道』麗澤大学出版会、2005年3月。ISBN: 4892054712

<紹介文>

アミタイ・エツィオーニは、アメリカの社会学者にして、コミュニタリアン運動（共同体主義）の第一人者と目されている人物です。

この本の前半では、国家と市場に加えて「コミュニティ」（地域社会から大きな社会まで）の役割を重視すべきであるということや、法と経済に加えて「道徳」の役割を重視すべきであるということが、平易な言葉で述べられています。

後半では、クリントン政権が実際にそのような方向（中道路線）に向かっていたことをふまえて（そもそもエツィオーニの議論がクリントン政権に大きな影響を与えていた面があります）、クリントン時代の政治や政策を総括し、反省すべきところは反省して、「善き社会」にむけて進もうということが、具体的に述べられています。

前半の「コミュニティ」についての議論は、地域の問題や社会問題を考える上で多くのヒントを与えてくれます。後半のクリントン時代を総括した部分は、昨年刊行されたクリントンの自伝『マイライフ』と合わせて読むと面白いかもしれません。

原著が書かれたのは2000年のブッシュVSゴアの大統領選挙運動中で、古くなっている情報もありますが、基本的な論点は現在でも通用するものです。とはいえ、ブッシュ政権において、アメリカ社会はかなり変容しました。監訳者解説では、このことについて詳しく述べました。またここでは本の注釈を超えて、より広い観点から「コミュニタリアニズム」について解説しました。

在学生の研究業績 (平成17年1月～6月)

氏名	タイトル	掲載誌・刊行年月等	形式
長谷川亮一	アジア太平洋戦争下における文部省の修史事業と「国史編修院」	『千葉史学』第46号（2005年5月）14～37頁	論文
角田季美枝	地方自治体の化学物質対策の現状と課題をふまえた国の制度改善提案－P R T R法の情報活用に関するアンケート調査結果	『公共研究』第1巻第2号（2005年3月）	論文
角田季美枝	化学物質に関する製品環境表示の改善に向けて	『平成16年度 環境省請負業務結果報告書 平成16年度有害化学物質のための新たな政策枠組みについての調査研究業務報告書』オフィスアイリス（2005年3月）	報告書（共著）
渡辺圭	ロシア正教会における20世紀初頭の異端論争『讃名派』問題－その思想的特徴と『アトス山の動乱』の背景－	『ロシア史研究』第76号（2005年5月）	論文

編集：社文研助手室（内線3574、sshassist@shd.chiba-u.ac.jp）

所在地：〒263－8522 千葉市稲毛区弥生町1－33 千葉大学内
社会文化系総合研究棟4階 助手室